日本神話と天体現象（その１）

星座で読み解く神話論

今回は神話と天体に関する話題提供をいたします。ここで取り上げるのは、勝俣隆2000『星座で読み解く日本神話』（大修館書店）です。私は2016年に保立道久先生から本書を紹介されて内容を点検したことがあります。その時には著者が歳差現象を軽視していることなどを問題視し、重きを置かなかったのですが、今回その部分は保留し、記紀神話に登場する国生みから三貴神の誕生にいたるまでの説話とそのモチーフに関する勝俣説（本書第５章）を紹介します。現在の私は考えを改め、注目すべき見解だとみているからです。

国生み神話では、男神イザナギと女神イザナミが天の御柱を廻りミトノマグワヒを果たすことによって国土の生成が進みますが、勝俣氏は天の御柱とその回りを男神が左廻りに、女神が右廻りに巡ったことの意味や背景に着目します。そして天の御柱とは、天の北極（勝俣氏の表現では「北極星」）に向けた仮想上の筋であり、ここを中心に北天の諸星が周回する現象への着眼が源泉となって、そこには柱が立ち地と天を固定していると考えられた、それが天の御柱の正体だと説きます。天と地をつなぐ柱が北天にそびえる、との観念は北方世界のアルタイ語族など各地にあり、また崑崙山の上に天に連なる柱が立つとの観念も古代中国にみられることなどが勝俣説の根拠です（同書77–79頁）。ではどのような情景であったのかを確認してみます。

天の御柱再現画像

図１には西暦645年（太安万侶が誕生した頃を想定）の奈良盆地からみた冬至の北天を示しました。ステラナビゲーター（10）の画像です。地表面から34.5°上空にある空白（実際は暗黒）の中心が天の北極ですが、ここに天を大地につなぎとめている柱が立つ、とみたわけです。さらに男神イザナギが天父神で、女神イザナミが地母神であるとすれば、男側は天界に、女側は地界に置かれ、両者がこの柱の廻りを逆廻りに巡ることによって国生みが果たされたことになります。

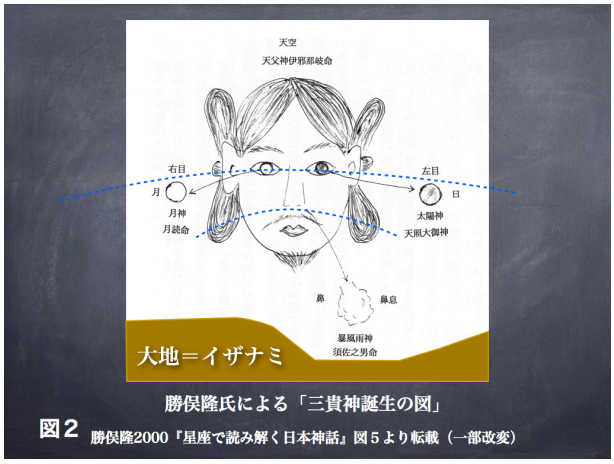
図１　勝俣隆氏の「天の御柱」＝天の北極説

だとすれば天が左廻りで地は右廻りになる関係は、北天の夜空を地上から見続けたときに知覚される情景そのものだと理解できる、ということになるわけです。

ここから天＝父神＝イザナギ、地＝母神＝イザナミという解釈が、天体運行に依拠した基本モチーフとして浮上してくるのです。

三貴神と天体

次に三貴神の誕生ですが、『古事記』では死したイザナミを黄泉国に訪ね、変わり果てたイザナミに追われて逃げ帰り、決別の儀ののち筑紫でミソギをおこない穢れを払う段で語られます。まず払われた穢れから住吉三神が生まれる



勝俣隆氏による「三貴神誕生の図」
図２　勝俣隆2000『星座で読み解く日本神話』図５より転載（一部改変）

のですが、そののち三貴神が誕生する場面を迎え、イザナギが左目を洗ったときにアマテラスが、次に右目を洗ったときにツクヨミが、最後に鼻を洗ったときにスサノオが生まれたとあります。図２は勝俣氏が示した元図（本書132頁,図５）に若干の加工を施したものです。

左が先で右が後になる序列については「左尊右卑」の観念など、古代中国側の思想の反映だともいわれますが、勝俣説の重要性は、なにをおいてもそのスケール観を強調したことにあると思うのです。天＝イザナギですから、そのスケールは視界の範囲を超える天空の最大域に達します。その両眼から生まれた太陽と月の神格化がアマテラスとツクヨミですから、イザナギに次ぐスケールを有する、これまた天空を巡る巨大な存在として相応しいではないか、というわけです。このようなスケール観をもってイザナギやアマテラス・ツクヨミなどを構想した点は注目すべきだと思います。

さらに勝俣説ではスサノオを暴風雨神としていますが、それは空に渦巻く積乱雲や台風雲を神格化したものだといってもよいでしょう。

諸神格の配列との整合性

このような見解に関連して私が注目したいのは、両目は同じ高さにあって鼻の穴は低い位置にくるという上下関係と、三神の誕生する順序と位置とがきれいに対応することです。天空の上層を太陽と月が廻り、その下層に雲がたなびきますし、雲によって太陽や月が隠れる関係をみれば、隠れる側がより高く遠いところを周回するといった、距離の遠近は識別しやすいのだと思います。そうした現実の天空の情景と三貴神の位置は一致しているのです。同じ意味で、太陽や月のさらに背後の天空上にイザナギが居座っている、という位置関係についても、現実の情景と整合することがわかります。

唯一、地母神たるイザナミだけは不動の大地の神格化ですから、強いていうなら私たち地上からの視線はイザナミの視線と重なる、といえるでしょう。

ちなみに『古事記』には、死したイザナミを埋葬した場所は伯耆と出雲の境の比婆の山だったと記されています。直前まで彼ら二神が生み出してきたはずの国土の山中に、なぜ女神の遺体だけが埋葬されたのでしょうか。その理由は明らかです。そうすることにより、イザナミは名実ともに地母神であることを説話中で再確認させる効果を生むからです。その神格を大地に固定することが叶うからです。

さて図３は、こうした天空上の諸神格相互の序列を模式図として示したものです。最上位がイザナギで、中位にアマテラスとツクヨミが周回し、最下位にはスサノオが徘徊する、という三層構造です。地上からみて遠く高いところに居座るものほど古くに誕生し、親子関係や兄弟関係にしたがって順次下降する構図であることに注目すべきだと思います。さらにアマテラスとツクヨミは天父神である父親に従って天の御柱を左廻りに周回する行儀のよい子神であるのに対し、スサノオだけは神出鬼没で予測不能な困った末弟神であるという、天空上での振る舞いにみる対照性とも整合する解釈だといえるのではないでしょうか。

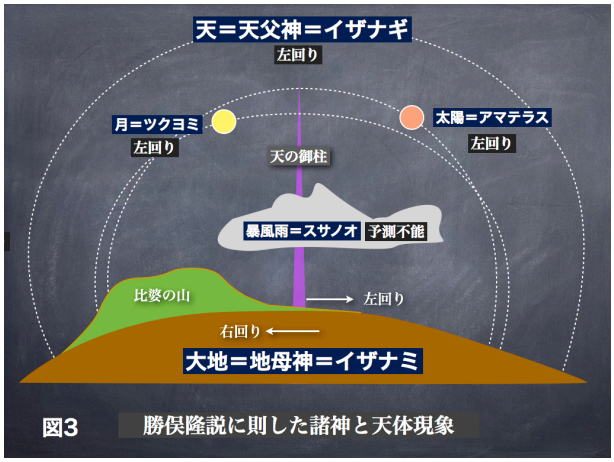


図3　勝俣隆説に則した諸神と天体現象

今述べたような勝俣説に則した理解が成り立つなら、国生み神話や三貴神の誕生は現実のスカイスケープを基礎に創出されたものであり、天と地の交わりが国土を含む倭人世界のすべての源泉である、と語られたことになります。さらにこうした図式であれば、はるかのちの時代に生きる人々にも、北の夜空を見上げさえすれば常に再確認できる説話だったことになります。たとえばイザナギは太陽や月を通して遙か

遠くから今でも我々をみつめている、といった感覚がそこから生まれます。距離の遠近はその後に経過した時間の長さに置き替えて認知されもします。だから勝俣説は注目されるのです。

もちろん『古事記』でのスサノオは、そののち天空から地上の出雲に放逐されることになり、さらにその後は根の国の主におさまります。したがって、その神格をたんに暴風雨神だと決めつけるわけにもいかないように思います。ただしスサノオの場合、誕生時に付与された神格と後に付加される諸神格とは一致しない可能性があるものと私はみています。ですから、誕生の場面設定や親子関係、兄弟関係に則した配列を重視するなら、勝俣説は充分に成り立つ余地があると考えます。

しかし図３のような構図を認めるとすれば、構図全体は古代中国からの強い影響を受けた結果ではなかったか、との懸念を生じさせることにもなります。天の御柱がそうですし、天と太陽・月の序列関係もそうだからです。ただしこの問題については機会を改めて検討することにします。